

Living device

Step up 「あたらさん」的生活考

【あたら 可惜】とは「もったいない」の古語で「あたらしい」の語源になったといわれています。【あたら=もったいない】に【さん=SUN=太陽】の恵みをプラスして、さまざまな情報を発信しています。



待合室の一角に一昨年やつと暖房室が。それまではひとざ掛けなどを備えて防寒対策をしていましたが、やれやれ一安心。

しなの鉄道で最も寒い駅舎の「防寒対策」は？ —— エコライフも行き過ぎには要注意 ——

無人駅舎に編集室を開設するとのニュースが流れて、信州のテレビ局から取材が殺到したとき、「冬もこの駅舎で仕事を？」と必ず聞かれました。県内でも特別に気温が低い避暑地・軽井沢。「夏は極楽だけれど冬は地獄。東京で仕事したほうが賢明ですよ！」と言われ、ネットにも「あんな極寒の地に常駐させられるなんて、編集者が気の毒だ。」と書かれました。そのうえ、しなの鉄道の職員の方には「我々は軽井沢駅をシベリアと呼んでいます。寒さで券売機が動かなくなることも。」と驚かされ「軽井沢駅がシベリアならここ追分駅はアラスカ！」と覚悟したのが2005年10月。

以来、毎年12月までに駅舎の「防寒対策」を済ませます。サツシユの腰板部分や窓には気泡緩衝材（≡プチプチシート）を貼り、壁には発泡スチロールのボードを建てかけ、空気の溜まり場（保温のコツです）を作ります。もともと宿直室だった寝室は寒冷地対応の二重窓ですが、分厚いカーテンで閉め切った冷気を遮断しています。床には塵芥集積所に届けられたマットレスを頂いてきて、何枚も重ね、畳の上にもカーペット。暖房は入居当初はエコを意識して、知人から頂いた火鉢に地場産の炭を使いましたが、ある夜、猫がまず吐き、夫が吐き、『これは二酸化炭素中毒！』と這って窓を全開に…という恐ろしいアクシデントに見舞われ、それからは石油ファンヒーターの威力に頼ることに。入居時に比べると、しなの鉄のアラスカは温暖化の影響でしよ、幸か不幸か、年々、過ごしやすくなっています。



冬の高原の駅は、雪景色と霧氷…自然が織りなす四季折々の美しさにいつも魅せられています。雪の積もった朝は、一番電車までに夜明け前から除雪作業です。

那須 由莉：らびす舎・代表

多くの家庭実用書や生活情報誌の編集に携わる。2005年『暮しの手帖別冊・あたらさん』の編集長として、創刊と同時に「しなの鉄道・信濃追分駅」駅舎に「あたらさん編集室」を設置、別冊の休刊後も継続して駅舎を借り、2021年まで運営。「もったいない=あたらさん」の知恵と心をコンセプトに、編集・制作と創作活動を続ける。信濃追分駅『オオヤマ桜を守る会』、軽井沢・借宿『ピオトップKBS』のメンバー。